

# 腹腔鏡内視鏡 合同手術研究会

Laparoscopic Endoscopic Cooperative Surgery  
第20回 2019年11月20日

■ テーマ 4	胃癌に対する LECS の現状と課題 Current status of LECS for gastric cancer treatment
---------	---

演者：竹内裕也（浜松医科大学外科学第二講座）

**Speaker: Hiroya Takeuchi**, Department of Surgery, Hamamatsu University School of Medicine, Shizuoka, Japan

共同演者：平松良浩（浜松医科大学外科学第二講座）、大澤恵（浜松医科大学附属病院光学診療部）  
川久保博文（慶應義塾大学外科）、後藤修（日本医科大学内科消化器・肝臓内科）

LECS 手技の開発と普及は、胃腫瘍周囲の切除マージンを過不足なく確保した局所切除術を可能にした。一方、増加傾向にある高齢者胃癌患者において、必ずしも定型手術が長期予後や術後 QOL に寄与していないことも明らかになっている。とくに早期胃癌については ESD と LDG、LTG とのギャップを埋める術式が必要であり、これが LECS の目指すところであることは論を待たない。

我々はこれまで 4 cm 以下の cT1bN0M0 早期胃癌に対して、まずセンチネルリンパ節（SN 生検を行って術中に pN0 であることを確認したうえで、原発巣を NEWS により切除する術式を開発し、これを報告してきた。また 2014 年より、胃癌 SN 生検を用いた局所切除術を含む機能温存手術例の安全性と長期予後、患者 QOL を評価する多施設共同試験（先進医療 B）が行われており、その結果が期待されている。煩雑なラジオアイソトープ法なしでも SN 生検を施行可能にする ICG 蛍光観察は、解決すべき課題はあるものの胃癌 SN 生検を一般臨床に普及させる切り札として期待されている。また原発巣占居部位別の SN 分布も明らかになってきており、これらは SN 生検を行えない施設や高齢者に対する LECS による胃癌局所切除術＋リンパ流域切除の一助になると考えられる。